
120円の物語

藍田いづる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

120円の物語

【Zコード】

Z9532E

【作者名】

藍田いづる

【あらすじ】

原田耕太はクリーニング屋の息子だったが、大型ショッピングセンターの開業のせいで大きな借金を抱えてしまう。現実から目を背け、借金苦から自殺を考えるが、最後に飲んだコーラのせいでは明後日の方角に向かっていく……。

第一話・晩餐の由(前書き)

10 / 20 総アクセス数4000Hitを越えました。お読み頂いた皆様本当にありがとうございます。

第一話・晩餐の缶コーラ

まだ自動販売機から取り出されたばかりの缶は、夏の日差しに晒されて、必死に汗をかいていた。僕はゆっくりと蓋を開ける。圧縮されていた二酸化炭素が僕の指を冷やす。缶ジューースを傾けると炭酸が胃の中へ落ちていく。喉は酸素を欲しがり、口からジューースを離すと僕は不揃いな呼吸を繰り返した。

ジューースを飲んだら死んでやろうと思っていた。用意ももちろん出来ていた。テーブルに置いた睡眠薬。致死量がどれくらいであるのかは判らないが、一掴みも飲めば十分だと思う。飲み終えて横になる。ゆっくりと閉じられたまぶたは一度と開かない。瓶の隣に置いてある缶ジューースみたいに変な汗をかいて、僕は段々と冷たくなる。そう想像する。

世の中の死刑囚の中には、死刑の前にでる食事が一番旨かつたと思う奴がいるらしい。本当にそつなら良かったのだと僕は思う。僕にとつてコーラは惰性と退屈を意味していた。

まあ、120円で幸福が買えるなら誰も大麻なんか買わないだろう。コーラのように泡のようにならう。浮かんでは消えていく自分の過去。最後の一 口を飲みきる前に僕は缶をテーブルに戻した。薬を飲み込むのに使うためだ。最後に体を動かしてみた。腕を回したり、伸びをしてみたりした。息を大きく吸うとゲップが出てきた。まだ僕は生きているし、息をしている。お別れだな自分。キザっぽい台詞を吐いて薬瓶から掌に薬を振り落とす。飲めばエンディングもなく、看取られる事もなく僕は終わる。そう思っていると、何も食べていないのに炭酸飲料なんか飲んだからだろう。僕は突然シャックリに襲われカプセルを撒き散らした。

何でこんな時にシャックリなんか……。シャックリをしながら僕は思った。僕はそれから薬を拾つてみたが飲もうとするときシャックリが出てカプセルがこぼれ落ちそうになつた。まるで体が自殺をする

る事を拒んでいた。僕は薬を拾うのを止めて汗を拭いた。時計を見ると十一時を少し過ぎたところだった。通りで暑いわけだ。とにかく時間はだけはあった。僕はシャックリを止めるためのいくつかの方法を頭の中で思い浮かべ実行していく。例えば息を止めてみるとか、水を飲んでみたりとか、思い出す限り様々な方法を行つてみた。しかし、締まりの悪い蛇口のようにしばらく時間が経つとシャックリは飛び出した。夏の暑さと思い通り行かない腹立たしさに僕は残ったコーラを飲んだ。一口しかないコーラは僕の乾きを増幅させただけだった。

もう無いのか……。と僕がジュースの缶を眺めるとそこには一枚のシールが貼つてあつた。

『あたりが出たら宇宙旅行』

僕は空き缶を潰した。親のせいで借金漬けにされた僕を、そのシールは見下ろしているように見えた。『希望』なんて生まれたときから僕にはなかつた。まるで見た目では判らない甘い味。アスパルテームと - フェニルアラニン化合物。

「何が宇宙旅行だ」

僕は空き缶を投げた。缶は跳ね返つてどこかへ飛んだ。怒った所で、無言の返事は僕を憂鬱にさせるだけだった。ふと、何か忘れている気がした。シールを見た瞬間からシャックリが止まっていた。僕はソファーに横になつてとにかく早く死のうと思った。それが最善の策だと自分を元気付けた。錠剤の蓋を開け手の上にのせる。十粒は軽く超えているだろう。僕は無理矢理それを飲み込んだ。溶けきるまでにはまだ少しある。少しずつだが眠気を覚える。ベット反対側を向くとそこにはさつき投げたはずの空き缶が落ちていた。目の前には先ほどのシールが僕を見ていた。何か、運命的な出会いなのかも知れないと僕は思った。最後ぐらい開いてやろうと思つた。僕は何気なくシールを捲つた。すると僕の予想に反して『当たり』の字。僕は再びシャックリが飛び出て、飲んだはずの薬を吐きだした。僕は慌てて飛び出したカプセルを集めようとしたが、時すでに遅し。

ぐりっと頭が揺れてベッドが弾んだ。僕は奈落の底に墜ちていった。

第一話・放心した僕は……。

僕は多分放心していたのだろうと思つ。家の近くにあるコンビニエンスストアの飲み物を入れる什器の前に僕は座り、並んでいるカラに付いたシールを剥がしていた。

「お客様？」

そう声を掛けられて、僕はふと意識を取り戻した。振り向くと、女人人が手を前に組んで僕をのぞき込んでいた。彼女は目を諫めていた。しかし怒つてるとこどうしたらいいか困つていうふうだつた。自信なさげに彼女は言った。

「あの、売り物にならなくなつてしまふんですが……」

彼女の目は深海のような澄んだ色をしていて、僕は見合つた顔を背ける事が出来なかつた。おかしな事に彼女も僕から目を離さなかつた。目元で切りそろえられた前髪がエアコンの風に揺れていた。

「もしかして、コウちゃん？」

大きな目を広げて彼女は言った。すると意識を失う前に駆け抜け行つた走馬燈の中に幼い彼女の姿を見付けることができた。松本詩杏。彼女は昔から深い色の目をしていた。彼女の家は酒屋を経営していて、僕の家はクリーニング屋だつた。町の商工会で、僕は彼女と知り合い、家族ぐるみの付き合いになつた。中学まで同じ学校に行つていたが、バブルがはじけて、僕の家庭が散れじれになつてそれ以降会つていなかつた。

「いつ、帰つて来たの？」

詩杏は囁くように言つた。コンビニの入り口からざわめき声が聞こえる。彼女は振り返る。部活帰りの少年たちが四、五人ジャージ姿ではしゃいでいる。僕は何も言いたくなかった。彼女の深い瞳にはもう悲しみは潜んでいなかつたからだ。幸の無さそう薄い唇にもずっと綺麗なグロスを付けて、形の張つたクリーム色のショートパンツと黒いハイソックスが子供っぽく、制服の内側に見える襟の張

つたシャツがちょっと大人びて見える。対して僕は昔から来ている安物のジーンズによれのよれのシャツ姿だ。髪の毛だつていつ切つたか忘れてしまった。でも瞳を再び合わせられると見透かされるような気がして口が開いた。

「2年前には戻ってきてた」

このコンビニに来た事を僕は後悔していた。酒屋がコンビニエンスストアに変わっていたから、彼女も引っ越していったものだと思つていた。彼女は何か言おうと口を開いたが、ちょうど棚の間から少年たちが覗き込んできて「すみません」と彼女を呼んだ。

「ごめん、レジしなきゃ」

彼女は走つていつてしまふ。途中で振り向いて「もう少しで休憩だから、良かつたら外で待つてよ。そのジュース飲んでいいからさ」と言い残した。死んでいるつもりだったから僕には予定も何も無かつた。家に帰つた所で待つてるのは催促状だけだ。僕は買ひ物がごとにコーラを入れてバックヤードにしまい。籠の中のコーラを一本とつて外に出る事にした。

僕が眠つていたのは僅かな時間だつたようで、外は暑く眩しかつた。アスファルトも焼けていて触つただけでやけどしそうだつた。蝉がどこからか騒がしく鳴いている。僕はコンビニの横の方にビルの影を見つけて座ることにした。彼女を思い出すとき付いて回るのは弁当箱だつた。うちの中学校には給食があるが、第一、第三土曜日だけは弁当を持参する事になつていて。もちろん僕の家には殆ど余裕がなかつたので、お弁当の中身などたかがしれた物だつた。だからいつも屋上に上がり一人で食べていた。そんな僕を知つてか、彼女は僕のためにおかずを用意してくれたりした。

あの頃はまだ幸せだつたな。僕は空を見ながら思つた。太陽は見えないくせに日差しが眩しくて僕はすぐ視線を戻す。今から考えば中学時代、彼女は僕の事を好きだつたのかもしれない。コーラの缶に僕がはがしたシールの跡がある。宇宙旅行が当たつたのは事実蓋を開けて喉の奥に流し込む。今日一本目のコーラは胃に溜まつた。

なんだろうか？と僕は疑問に感じる。現実感が薄れていると思った。
僕はポケットをまさぐり後ろのポケットにシールを見つけた。シール一センチぐらいの正方形で「当たり」と真ん中に書いてある。よく見てみるとあたりの所に透明に文字が入っていたりロットナンバーが振られていたり、偽造されないように作られていた。

「あたりが出ましたら、まずこちらにご連絡下さい。」

シールの表側にはそんな事が書いてあった。僕は公衆電話に急いだ。

第二話・ハイテクシール

電話はすぐにつながったが、もちろん事務的な自動音声だった。シールに書いてある番号を押せと言われたので、十一桁を間違えないように押すと、転送音がなって、転送音がなって、ようやく電話が繋がった。

「ご当選おめでとうございます。こちら「マーク株式会社、当選受付窓口」、玉田と申します。まずはご当選確認を致したいと思います」

玉田さんは手慣れたようにハキハキと言った。

「それではシールを空にかざして頂いてよろしいでしょうか？」
空にかざしみると薄いシールの中にエビチップやら薄型のカメラらしき物が蠢いている。

「そのシールを親指に貼つて頂いてよろしいですか？」

言われるとおりになると、赤く光った線がシールの中を通り抜けていった。

「もしもし、指認証いたしました。住所は西からめ市殿村五丁目でよろしいですか？」
なぜ、こここの住所がわかるのだろう？公衆電話に書いてある住所を探す。

「えーと……そうですね。殿村5丁目です」

「はい確認いたしました。それではお名前、性別とチケットをお渡しする場所をご申しつけ下さい」

「チケットをお渡しする場所？」

僕がそう聞くとオペレーターは早口で答えた。

「転売目的や、偽装、紛失などの対策のためにチケットは直接手渡しに限定させて頂いております。レストラン等をご指定頂いてそこで直接お渡し致します。ですのでお客様の現在地から近い場所ですと西ガゴメショッピングセンター横のファミリー・デイズというお店になります。今日のうちにしたら、夜七時以降でしたら大丈夫です。

「今夜の「J」予定は御座いますか？」

「はい、大丈夫ですけど……」

「それではそちらに予約を致しておきますね。それでは、お名前と性別をお伺いしてもよろしいですか？」

何がどうなつていいのだらうかと僕はシールをいじくりながら自分の名前と性別を言った。

「はい、了解いたしました。あと、こちらは重要事項になりますが、この応募はペアチケットになつています。ただし異性のお客さましか同乗出来ません。あと、国籍もコーク株式会社の方針で国内の国籍をお持ちの方でないとなりません。レストランの食事代、予約はこちらでさせて頂きますので、先にレストランに出向いておいて頂けると助かります。ここまで何かご質問ござりますか？」

僕は何もかもに質問はあるよつな気がしたが、ありませんと答えた。

「はい、それではお電話ありがとひびきります。私、玉田が対応させて頂きました。ありがとうございました」

電話の切れた音が聞こえて、僕は受話器を下ろした。蝉の声が辺りに甦る。これだけでいいのだろうか？　まあ、いいかと僕は再びビルの陰に腰掛けた。

しばらくして、彼女は自動ドアから出てきた。

第三話・ハイテクシール（後書き）

仕事が忙しくなつてきて、休憩時間に書いてます。あー時間が欲しいこの頃。

今回更新で200heitを更新しました。読んでいただいた皆様。本当に感謝です。

第四話・背の低くなつた彼女

店員用の服を脱いで髪を下ろした詩杏の姿は昔の氣の強い詩杏とは違つていた。あの頃は僕と殆ど同じぐらいの身長だったのに、今じゃ自分より遙かに低くなつていて。僕はケツをはたきながら立ち上がつた。彼女は眩しそうに手を細めて空を見た。

「暑いね」

僕は顔を拭う。汗が腕いっぱいに垂れていった。

「暑いよ。真夏だよな」

コンクリートに座るなり彼女は言つた。

「今、どうしているの？」

僕も再び腰を下ろしてアスファルトを見つめた。

「近くのアパートで暮らしてゐる

彼女もきっと聞きにくいやうなと僕は思い、氣の進まない話を切り出した。

「借金は今も昔も変わらないままなんだ。今はバイトとかして何か生活してゐるよ」

自分の生活を吐露するのは氣分の良い物では無い。それでも借金は減つたのだ。そうやって僕は自分を励ましてきた。そつかーと彼女は意味深なのか会話をつなげようとしているのか空に顔を向けた。「うん。コウちゃんが居なくなつてしまらくしてからね。ここも再開発が進んで、随分変わつたでしょ？」

ここに戻つて来たとき、町の風景の違いには驚いたものだつた。僕の家だつた場所には大きなビルが建つていて、目の前の道には二車線道路に変わつっていた。振興住宅地が増え、昔からあつた家は風化していた。

「でかいショッピングセンターが出来たんだよな。行つたこと無いけど

「そう、借金取りたちはこの地区が再開発される情報を知つてて、

詐欺のように土地を奪つていったのね。今更だけど

そうだったのかと今更ながら僕は思う。

「行ったことあるの？あのショッピングセンター」

「いや、全く」

こんな服で行けるわけねえよ。家族ばかりが集まつてくるショッピングセンターに浮浪者みたいな人間が行つたら浮きすぎている。
「私も……。ここに昔からいた人はみんな残つた小さな店で買い物してゐる。でも新しく住宅地に入つて来た人は、みんなあのショッピングセンターに吸い込まれて行くの」

「しようがねえよ。何でも変わつていくし、変わらなきゃいけない物だろ」

言つた途端、その言葉は自分に向けられる物だと思つた。でも借金は無くそつとしても無くせる額でも無かつた。だから僕は慌てて話題を変えた。

「コンビニで働いてるの？」

「手伝つてゐただけよ。今は大学生。もう四回生だからあんまり授業ないんだ。お兄ちゃんが新しいお店を出したせいで、店長代理をさせられての。もう我就職決まつてゐるのに参つちやう」

「なるほどね。昔と變つたんだな、詩杏も……。なあ、大学つてどんな事をするんだ？」

「私はね。今はずっと天文学を学んでるの」

一度空を見ると顔を僕の方に向けた。

「意外だつた？」

僕はうなずいた。

「両親が喧嘩してた時、よくここから空を見てたの、しばらくして

お母さんが天体の本を買ってくれて、それから興味を持つたの」

詩杏の口ぶりは自慢のようだつた。ふと僕は当たつた宇宙旅行の事を思い出した。

「宇宙飛行士になりたいと思つた事はある？」

詩杏が宇宙旅行に行きたいか。僕は探りを入れてみる。

「現実的じゃないから考えなかつた。大学卒業したら博士にならうと思つてこゐ訳ぢやないし……」

そりや そうだよなと僕は思つた。

「なあ、やし、宇宙にいかなつたら行きたい」と頬づり

「えー、そりやだれだつて行きたいんじやないかな？」
きつとね

その言葉を聞いて僕は宇宙旅行を彼女にプレゼントする」といじ

「なあ、俺がその、放心していた理由なんだけどよ」

わざとらしく僕は一呼吸置く。すると彼女は両手を僕の前につきだした。

「待つて！　まさか宇宙旅行が当たったなんていわないでね。私今

ポケットをまさぐり、当たったシールを彼女の手の前に出して僕は笑つた。

「それが当たつちまつたんだ。今日の夜に渡しに来るんだってよ」

「彼女は嘘でしょ? と聞いて僕の持った。」

「本当に当たりなの?」 こんなのは誰だつて偽造出来そうだけど……

僕は彼女からシールを返してもらい空に向け、事の顛末を話した。

なるほどね。多分それはCBSとオーディオブックセレクションだね。他にも何か入っているんだろうけど……

彼女はそう言って色々な角度からシールを眺めていた。

「それさ、ペアチケットなんだけど、良かつたら一緒に行かないか

勇気をだして僕は言った。

「えつ、無理だよ」

意外な言葉に僕は死にたくなつた。

「そう簡単に貰える訳無いよ。これ売つたらウン千万は手に入るん

太陽

「駄目なんだ。転売とかそういう事出来ないようになつてゐるんだ。

ただ一人でいつてもしょうがないからさ

詩杏は僕の言葉を聞いているのか、いないか。何か考えているようだった。そして詩杏は言つ。

「ねえ、あまりここでおしゃべりしている訳にいかないから、また会いましょう？出来るだけ早く。その間に私は宇宙旅行の事考えておくからさ」

詩杏はお尻をはたいて立ち上がつた。

「携帯電話は持つてる？」

僕は首を振る。

「じゃあ私の仕事七時上がりだから、今日の夜に会おうよ　どう？」
「今夜空いてない？」

髪留めをどこからか取り出し、彼女は再び髪の毛をまとめあげた。
「七時からファミリー・デイズでチケットの受け渡しがあるんだ」「じゃあ八時なら大丈夫だよね。私、八時になつたら向かうから…」

…

笑顔を作ると彼女は僕に背を向けた。

「ちょっと待つてよ」と僕は声を掛けたが彼女は僕に手を振るとそのまま店内へ消えて行つた。

第五話・一生で一番忙しい午後

西力「メシヨッピングセンターは象のようないびきを空に伸ばし、行き交う人々は皆忙しそうだった。ファミリーレストランに着いたのは六時半過ぎぐらいだったが、予約された席にはもう男が座っていた。三十代ぐらいの背広を着た男は辺りの家族連れとは異質な空気を放っていた。僕に気がつくと陽気な顔をして手を挙げた。男の前まで行くと男は席に手を向け僕を座らせる。

「初めてまして。チケットセンターの田代です。よろしく」

僕より一回りぐらい大きい男は小さい名刺を礼儀正しく渡してきた。どう受け取れば良いのか判らず慌てて受け取ると男は值踏みするように何度も軽く頷いた。

「原田君だけか？　君は大学生かな？」

田代と名乗る男は水を飲みながらそう聞いてきた。僕が黙つていると男は続けた。

「いや何、気にしないでくれ。さつき対応していたお客様も大学生だったんだ。なんせお年寄りやサラリーマンなんかはコーラなんか飲まないからね」

気の利いた事を言えないと男はアタッシュケースをテーブルの上に乗せて書類を出した。

「ま、そんな前置きはいらないって顔だな。じゃあ、早速、書類に入ろうか。書きながら聞いてくれればいいよ」

田の前に出されたのはパンフレットと三枚の書類だった。一枚目は本人確認と申込書のようなものだった。

「まず聞いていると思うけど、チケットはペアチケットになってる。簡単な話。家族なんかはNG。ここはいつも何故かつて聞かれるんだけど、宇宙に行つた写真をコーカの広告で使うからなんだ。判るだろう？　先ほども言ったとおり、コーカのメインターゲットは若者だ。活気に満ちた姿、そして宇宙でコーカを飲むシーンを取る。

それだけで広告としては非常に大きな利益が生まれる。だから、連れて行くのは、女の子でなきゃいけない？ 彼女なんかいる？」

僕は詩杏の事を頭に思い浮かべたがすぐに打ち消した。男は不敵に笑つてなるほどねと言つと話を続けた。僕の書いている書類も二枚目なつた。

「宇宙は未だに危険でまだ未知の部分が多い。だから、万が一事故が起きても当社では保証出来ない。ただ一応保険はかけてある。死亡事故が起きた場合一億円。そのほか入院費用がかかる場合など細かい事が書いてある。読んでよらつてサインをしてくれ」

その紙もざつと目を通してサインをした。別に僕にはどうでもいい話だった。

「オーケー。これで君は正式な登録者だ。口ケットに乗るのは12月1日の予定だ。詳しくはパンフレットに書いてある。ただ天候が優れない場合は延期される場合もある。それじゃあまあ、終わりかな」

仕事を終えた緊張のない声だった。

「これだけなんですか？ 宇宙にいくなら練習なんかの必要があるんじゃないんですか？」

男は首を振る。

「これで終わりだよ。あとは書類に書いてある事をよく読んでおいてくれれば大丈夫。訓練が必要ないような設備が整えられているから何も心配はいらない。」

男はおもむろに僕の名前の書いたチケットを渡しアタッシュケースを閉めた。僕は思わずそのチケットを光にかざした。

「シールみたいな工夫は何も無いよ。当選者のデータはコッチで預かってるから、そんなものはただのお飾りだ」

男はネクタイを少し緩めて立ち上がった。

「それじゃ、私はいくけど、君はどうするんだ？ 一応夕食が済んでいないならウエイターに言えば持つて来てくれる」

「僕はこの後ここで人と会う予定があるんです」

「これが？」

男は小指を立てる。僕は首を振つて男を見送る。男は伝票をヒヨイと持つてそのまま台風のよう而去つていった。家族連れの和やかな雰囲気があたりを包んだ。僕は手首を握つて暗くなつた外を眺めた。

第六話・藍色のスニーカー

「「ごめん、遅くなつたね」

僕はお店に掛つてゐる時計を見る。一十時半、三十分の遅刻だ。
「どうしても調べておきたい事があつたの」

そう言つて彼女は席に座るとお店のレシピを開いた。

「お腹減つちゃつたんだよね。もうコウチちゃん食べた？」

「ごめん」

彼女は静かに笑う。

「謝らないでよ」

彼女はエビグラタンを店員に注文しレシピをテーブルに置いて両腕を組んだ。

「それでね、宇宙旅行の話なんだけど、ただ貰つてていうのはなんだから、明日一緒にショッピングセンターに行つてみない？ 商品券が余つてるから」

彼女は財布の中から一万円分の商品券を五枚出した。

「そここのショッピングセンターが出来たとき近隣の家に配られた物なの」

僕は返答に困り首を搔いた。

「でも、あのショッピングセンターには行かないんじゃなかつたの？」

「変わらなきやいけないってコウチちゃん言つてたじやん。コウチちゃんもその服じや行きにくいだろうけど、新しい服を買えばきっと気分も変わるよ」

女の子らしい発想だつた。だからといつて僕の借金がなくなる訳じゃない。僕は先程もらつたチケットと彼女の分の契約書をテーブルにだし、代わりに商品券を受け取つた。

「じゃあ、これでいいわけだね」

「うん。とりあえずはね」

彼女はバッグの中から筆記用具を取り出しながら言った。正直宇宙旅行が5万円分の商品券に引き換えるというのは、安い気がした。でもこれを転売することは出来ないし、彼女に僕の借金を肩代わりしちゃなんてもつてのほかだ。僕がそんな事を考えている間に彼女のエビグラタンが届いた。書類をバッグにしまい、エビグラタンを彼女はほおばる。しばらくたわいもない会話を弾ませた。大学がどういう所なのかとか、僕にどんな服が似合うかとか、そんな話だ。彼女が食べ終わり飲み物を一口飲むと一呼吸置いて話を切りだしてきた。

「言いにくい事だと思うんだけど、コウちゃん借金幾らあるの？」
勿論借金の額を自分から言いたがる人はいない。僕もそうだ。でも彼女の目は真剣だつた。

「一ヶ月10万円くらい利息として払ってる。要するに借金は膨大な数字つて事だよ」

彼女はため息を付いて肩に耳をつける。僕も同じポーズを取る。
借金さえ無ければ、服を買ってデートスポットを雑誌で探して、
彼女を誘つてみるなんて事も出来るのかもしれないが、僕にそんなことは出来ない。

「ねえ、よかつたらなんだけどさ、うちのコンビニで働いてくれないかな？ もちろん店長候補としてなんだけど……」

「ダメだよ」

僕は首を振る。彼女に情けを掛けられたら、僕は絶対後悔すると思つた。

「別にコウちゃんを助けたいから言つてる訳じゃないの。今は私が店長の代理をやつてるんだけど、卒業したら私の代わりになつてくれる人を探さなきゃいけないの」

お互ひ黙りあつた。仕方なく僕は言つ。

「明日どうせまた合うんだから考え方させてよ」

目を伏せたまま彼女は「いいよ」と言つて、無理な笑顔で僕を見た。重たい空氣の中僕らは店を出ることにした。外の並木道には力

ツプルや残業したサラリーマンがちぢらほらいて柔らかな暑さを感じる。彼女の体。僕の体。どれ位の距離がちょうど良いのかわからなくて、近づいたり離れたりした。彼女は何かを考えているようだから僕も考えた。コンビニの店員を職業にすることはどうこうことなのだろう？ そうする事でどういう弊害があり、借金はどう変化するのか考えた。でも、僕の頭は上手く働いてくれなかつた。これだけ突然に色々な事があつて、整理が上手くついていないのだろう。だから僕の考えは半端なまま、僕と彼女の距離みたいに行つたり来たりしていた。

第七話・小悪魔な笑顔

駅へと続く並木道には銀杏の木が青々と葉を広げ、歩道に色とりどりのレンガが敷き詰められていた。森で人が迷うのは、まっすぐ歩いているつもりでも、右か左に少しずつ傾いていつてしまうからだ。結果大きな円を描いて同じ場所に戻ることになる。いつの間にか僕は同じ所を回っていたのかもしれない。不幸な生活に留まる事で、そんな自分自身に酔っていたのかもしれない。一晩かけて出た答えはコンビニエンスストアで働いてみようという事だった。そして地道に借金を返し、彼女とどこかに出かけて、もつと人生を楽しむべきだと思った。息を弾ませて僕は彼女とどんな話をしようかと考えながら駅に急いだ。

駅前に着くと彼女が先に来ていた。お団子を作った髪型は昨日とは違い、昔の気の強い彼女を思い起こさせる。黒ワンピに赤いハイヒール。おはようと機嫌の良さそうな彼女の隣りにいたのは40代ぐらいの男だった。茶色いスーツと黒い眼鏡を掛け、くわえ煙草で空を見ている。僕の事など気に掛ける様子もない。勿論一人で出かける物だと思っていたので僕はたじろいだ。

「ごめん、この人弁護士の鷺巣さん。今日お世話になる人」

思わず僕はその人と挨拶をするが、男は軽くうなづくだけで目を反らした、一体何のためにこの人がいるのかわからない。悟ったかのように彼女が言う。

「まず先にコウちゃんの借金を少しでも減らして貰おうと思つて来て貰つたの。コウちゃんいいよね」

もちろん目の前にその弁護士が立っているのだ。拒否できる訳がなかった。

「まあ、借金が減るのは嬉しい事だけど……」

曖昧に言葉を濁すと、じゃあまずは信用会社でコウちゃんの借金の明細を調べに行くからねと改札の方に歩き始めた。考えてみれば

そもそも駅に集合という時点でおかしな話だった。携帯灰皿に吸い殻を捨て男も彼女のあとを付いていった。仕方なく僕も付いていく事にした。

信用会社で調べた結果、僕は5社から借り入れを行つていて、合計で523万円だった。お陰で五社の消費者金融の会社を回る事になり、都会に馴れていない僕にはバイトを一日に二つ掛け持ちするより辛かった。町を歩く人の視線がまるで僕を責め、嘲笑しているように見えて仕方なかつた。本社での交渉は氣の悪い弁護士に任せてあつたので、暇を持て余し、時間は金太郎飴のように長くずっと同じ形だつた。彼女に聞けば、利息というのは一種類あるそうだ。

一つは出資法で定められている29.7%。もう一つは利息制限法で定められている14.8%。でも実際使われているのは出資法による利息で、利息制限法は意味のない物になつていて。その理由は利息制限法には罰則がないからだそうだ。しかし、法律上では利息は14.8%以内でなければならぬので、訴えれば利息制限法の金利に直すことが出来る。

五社目が終わってさすがに男も疲れたようで猫背になつていた。「とりあえずこれで後はATMに行けば終わりだ。金は後で口座に振り込んでくれ」

ATM? どういうことだ?

「わかりました。どうも今日はありがとうございました。あの事はちゃんと黙つておきますから」

「そうしてくれ」

男は力ない笑顔を浮かべると階段から降りていった。彼女は丁寧に礼をして男を見送つた。僕も一応彼女のまねをしてお辞儀をする。どうもあの男は彼女に何か秘密を握られているようだ。

「さあ、お楽しみの時間だね」

彼女も疲れていたはずなのに急に元気になつっていた。

「僕の口座にはお金なんて無いですよ」

「それはどうかな?」

彼女は不適に笑う。服に似合つた小悪魔な笑顔だった。

サバンナの象をイメージさせるような西カゴメショッピングセンターから出たときには、もう夕日も落ちかけていた。両手に買い物袋をぶら下げて重い重い。明日からコンビニで仕事を始めると思つと早く帰りたかった。

「ねえねえ、せっかくだから、ファミレス寄りついよ」

「彼女はどこまでも元気な声で言つ。

「まだよつてくのかよ。詩杏も本当に元気だよな。明日仕事じやないの？」

「お祝いなんだからいいじゃん」

彼女は口をとがらせて言つ。仕方なく僕は彼女の要求を受け入れた。彼女はパフェが好きらしく、席に付くとすぐにストロベリーパフェを頼み、僕はグレープフルーツジュースを頼んだ。

「いやー結構買っちゃったね」

彼女は自分の買った服を出しながら言つた。

「まあ、でも商品券だからいいんじゃない？ 僕ちょっとトイレ行ってくる」

彼女の要求を聞いたのは自分の買った服に着替えたかったからだ。買い物袋を持つて僕は席を立つ。彼女は「はい、はーい」と僕を見ずに答えた。

トイレの個室に入るととりあえずと思い、自分の服を脱いだ。ポケットの中の紙切れが落ちた。ATMから打ち出された、引き出し記録だつた。ATMの残額は372万円。もちろんもう借金は無い。しげしげと僕は残額の欄を見てにやけた。でもわざとらしく首を振る。手放しで喜びたい気持ちもあつたが、母親が寝ずに仕事をしてた日のことを考えると母親の死は何だったのかと思う。彼女を待たせているわけにも行かず、僕はそそくさと服を着替えた。一応手を洗い洗面台で自分の顔を見て髪を整える。川の上流のように流れる髪型。これからは毎日ワックスをつけなきゃいけないと美容師は言

つっていた。入る時は苦痛の連続だつた。エレベータに入るとカツプルや家族連れは嫌みな視線を向けてクスクス笑う声まで聞こえた。店員には相手にもされず、ゴミを漁るカラスのように見られた。

でもお洒落な服を着て、髪を綺麗に切つて、詩杏と一緒に歩く姿を考えると何とか耐える事が出来た。あとは彼女にこれを渡すだけだと僕は内緒で買った物を買い物袋からポケットに移し替えた。

席に戻ると彼女はすでにストロベリーパフェを食べていた。顔を上げると満足そうな顔をする。

「着替えたんだ。いいじゃん。似合つてるよ」

僕はどぎまきしながら席に着いた。

「今日は本当に疲れさま。『メンね。勝手に弁護士よんじやつて前髪を払いながら言つた。

「本当だよ。訳が判らなかつた

「でもそうしないと言つこと聞いてくれなかつたでしょ？」

「ああ、たぶんね」

もし先に言われていたら、やっぱり面倒だし、母親の事で悩んでいたと思つた。彼女はそんな事まで考えていたのかと僕は心の内で関心した。スプーンがガラスの中で踊つた。テーブルを見ると彼女はすでにパフェを食べきついていた。僕も慌ててグレープフルーツジュースに口をつける。その間に彼女はバッグの中から紙を出した。

「これが明日からのシフト表だからよろしくね」

グラスをテーブルに置き、シフト表を受け取る。朝の六時から夕方5時までがずっと続いている。

「これは今日はもう早く帰つた方が良さそうだな」

僕は苦笑いを浮かべて彼女にいつた。

「まだ序の口かもよ」と彼女は笑い伝票を手に取つた。それが帰る合図だった。

外は暗く、昨日もここから一緒に帰つた事を思い出した。外灯の光が反射して鏡状態になつたガラスに自分の姿が映る。茶色いストレートのチノパンにシワ加工された赤いTシャツ。まるでツギハギ

の口ボットみたいに思えた。服を脱いだら、僕は昔の自分に戻ってしまうんじゃないかなという予感が頭を駆け抜けた。

不安を打ち消すように僕はそつと彼女の手に触れた。「どうしたの」と彼女は僕の方を向いて、さりげなく手を握り返してきた。だから僕は何でもないよつて笑顔を見せた。後ろのポケットをさすりながら、もし彼女がコレを受け取ってくれれば、僕は現実感を取り戻せるとthought。

第八話・現実感のない現実（前書き）

最終話です。

ここまで読んでいただいた皆様に感謝します。

第八話・現実感のない現実

「大丈夫？ 顔色悪いよ」

リクライニングシートから起き上ると頭の中がぐぐもつっていた。彼女は窓の腰に肘を立てかけていて、僕を覗き込むように顔を近づけていた。

「ああ、大丈夫。もう、ここは宇宙の中？」

ゆっくりと頭が目を覚ます。拒むように頭が痛くなつてくる。僕は辺りを見回した。機内は小さい旅客機のように綺麗に整えられていて明るく、一列のシートが並んでいた。

「そうだよ。もしかして記憶まで無くしちゃったの？」

彼女は僕に体を近づけて言った。意識を失う前のこと僕は必死にたぐり寄せた。僕が意識を失つてしまつたのは、ずっと眠つていなかつたからだつた。航空機に乗るのが初めてだつたから、昨日は緊張して疲れなかつた。今日の朝になつて彼女と一緒に成田空港からフロリダまで行つて、そこからバスにのつて馬鹿でかいスペースシャトルに乗つた。そこまでは思い出せたが発射のときは思い出せなかつた

「きっと長旅で疲れてたんでしょう？ もつたいないなあ、発射するときに意識失つちゃうなんて。ほら、あつちに地球が見える」

彼女は左斜め後方を指さした。僕の視界を覆うほどの大きさの地球が目の前をゆっくりと回つていた。暗闇に反転するように写る海の青は僕の自我を溶かしてしまつた。声にならないほどの大威圧感と安心感があつた。そして僕は宇宙にいるのだと実感できた。

「ほら、あれ見てよ」

彼女は僕の前に身を乗り出して左前方を指で指した。その先には、見たことのない大きく輝く星があつた。

「あそこにあるのがシリウス。地球から見える一番大きな蒼い星なの。で、あつちにあるのはカノーブス星。一番目に明るい星なんだ

けど高度が低すぎて普通は見えないんだよ。何で色が違うのか判る？」

「いや、判らない」

自然と僕は首を振った。

「シリウスはもうすぐ死んじゃう星なの。カノープスの場合は太陽に似て黄色っぽく見えるでしょ？ これは炎が燃える時の赤と青に似ている。炎は温度が高い所は赤くなつて低い所は青く見えるでしょ？ シリウスはもう惑星自身に燃やすエネルギーが無くなつて、燃え尽きようとしている所なの。つまり温度が低いの。だから青っぽく見えるの」

彼女は自信満々に言つた。僕は大きく息をしてじっと覗き込む。「すごいんだな。なんか判らないけど、心が洗われる感じだね」

「もしかしたらあの星もう死んでいるかも知れないんだ。ここからシリウスまでの距離は8光年と言われているの。つまり光が進む速度で8年かかる距離つて事。言い換えれば、私たちが今見ている光は8年前の光なの。カノープスなんか300光年。今見てる光が1700年に放った光なんだよ」

饒舌にしゃべる詩杏は可愛かつた。彼女は幸せそうなため息をついて散らばつた星たちを瞳で拾い上げた。

「宝石箱みたいじゃない？」

彼女は窓辺を見ながらどこまでも深い目で星たちの光を吸収していた。そんな光景が、僕の奥の奥まで締め付ける。僕は慌ててポケットを探る。そこにはちゃんと小さい箱が入つていた。僕は想像する。彼女が僕の用意した指輪を受け取つて指にはめてくれる姿。そして首を振り断られる自分の姿。不安と期待が錯綜する。僕は彼女に指輪を渡す決意をした。

「なあ、渡したい物があるんだけど」

彼女は変哲のない顔で振り向く。喜んでくれるのか、それともただありがとうと言われるのか、どうして？って聞かれるのか。いろいろな場面を想像する。

「これさ、受け取つて欲しいんだ」

小さな箱を彼女の目の前に出して、蓋を開こうとした。その時だつた。突然機内の明かりが消灯し聞き覚えのない声でアナウンスが流れた。

「皆様、緊急放送です。直ちにシートベルトをお閉めください。タバコをお吸いにならされている方もすぐお消しください。当機に隕石が接近しております。衝突を避けるため、間もなく急加速いたします。動力確保のために重量装置も一時停止いたします。シートベルトは必ず締めてください。間もなく当機は緊急加速します」

辺りは途端にざわめきだした。

「え、なに？ どういうこと？」

非常灯のおかげで何とか彼女の顔を見ることが出来た。彼女が真っ暗な中で辺りを見回していた。機内の温度が冷えた気がした。暖房が弱くなつたのかはわからない。震える手でシートベルトを閉め、両手を膝掛けに置いた。

「どうしよう怖い」

僕の腕に詩杏の体が乗つかる。

「大丈夫だよ」

なんとか平静を保つて詩杏の体を抱きしめた。耳の奥にエンジン音が突き刺さり、体がふわりと浮かぶと背もたれに引き延ばされた。機内の電灯も殆どけされて詩杏の顔を確認するのがやつとだつた。詩杏は首を反らしじつと窓の外を見ている。

「ねえ、あれじゃない？」

不自由な体を何とか彼女の近くに寄せて、僕も窓の外を見た。

窓の外に見えたのは酷いニキビ面した隕石だつた。比較物が無いおかげでどれくらいの大きさなのか検討も付かなかつた。石ころのようにも見えるが、地球のようにも見えた。正確に言えば隕石は近づいて来ているのであらうが、大きくなつていてるというのが正しい表現に思えた。徐々に隕石は左の方向へと移動していき体も左の方に押しやられた。船体が曲がろうとしている。詩杏は僕に押しやら

れ「痛い！」と言つたが僕の意識は隕石が離れていく事に集中していく、徐々に安堵感が満たしていくのを感じた。ゆっくりと遠心力は弱まっていき、浮いた体は重さを取り戻した。電力が回復し、船内に会話が戻り、機内は落ち着きを取り戻した。詩杏を覗き見るとまだ窓に顔を近づけていた。

「よかつたな。なんとか隕石は避けられたみたいだ。ところでさつきの話なんだけどさ」

呼びかけても詩杏がこちらに顔を向ける事はなかつた。
「まだ、終わつてない。こんな地球の近くで隕石が通るなんてありえないよ。やばいよ絶対地球に墜ちるよ」

僕は再び窓の外を見た。隕石は地球の横にあつた。そして段々と小さくなつていつていた。軌道的には地球には向かつていなかつた。

「この軌道なら大丈夫なんじやないの？」

顔に掛かつた前髪を左手で払いながら詩杏は僕に向かつて叫んだ。
「判つてない！ 地球には引力があるのよ？」

僕は無言でシートベルトを取り、窓に張り付いた。隕石は詩杏が言つていたように地球に向けて吸い込まれていつた。そして音もせずに消えていつた。僕と詩杏はお互いの顔を見合わせた。知らせなきやならない。と思い僕は立ち上がつた。

「おい、隕石が地球に落ちたぞ！」

僕の声に機内は途端にどよめき始めた。

「地球の人たちだって判つてるはずだし、きっと打ち落としたよな腰を下ろしながら言つた言葉は切れかけた電球のように弱々しかつた。

「そんなの私に分かるわけ無いじゃない」

詩杏は首を振つて頭を抱え込んだ。何とかしなければならない。

「俺、乗務員に聞いてみるよ。地球と連絡が取れるはずだから……」

詩杏は顔を揚げてゆっくりと頷いた。席の間から身を乗り出し艦首を見るとすでに乗客が詰めかけていて乗務員が必死に対応していた。

「おい。どうなってるんだよ。航空会社の責任なんぢやないの？」

肥えた男がハンカチで額を拭きながら叫んでいた。寝癖の付いた小さな子供がどうしたらいのか判らず辺りをうろついて回っていた。乗務員は両手を前に出し落ち着けようと呟んでいたが、乗員のフラストレーションは高まっているようだった。何か情報を……と思いつら立ち上がりとすると、力なく服を引っ張られた。詩杏は反対の手で口を押さえて首を振った。詩杏のあのどこまでも透き通った黒い瞳が濁っていた。

「地球が燃えちゃってる……」

力の無い声で詩杏は言った。思わず僕は反発する。

「燃える？ 水の惑星が燃えるわけ無いでしょ？ さすがに」

地球の九八%は水なのにそれが全て蒸発するわけがないだろう？ と僕は付け足すつもりだった。その時船内を眩しい光が覆った。僕は思わず目をつぶった。ざわざわと騒いでいた声も静まった。目を開けるとコーラが飲みたくなるような黄金色の光が船内に差していった。目を閉じても眩しいと感じる強い光だった。次第に目が慣れて、僕は窓の外を見ていた。

地球の姿は燃えているという表現よりは爆発しているという方が正しかった。縁に行くほど赤々として、風船が無限に破裂を繰り返しているような状態だった。

人類が生きていた形跡は無くなっていた。まさに人が死んで星になっていた。夢であつて欲しいと僕は目を擦つてみたり目を閉じたり、顔を拭つたりした。でも地球は太陽一世のままだった。そしてまた突然にしゃっくりが飛び出した。僕は当たりを引いた日の感情が巻き戻った。ふざけるな。こんなのがいいのかよ。せつかく何もかも上手くいき始めたのに、何でこんなことが起こるんだよ。

「こんな現実じゃねーよ

僕は大声で叫んだが、詩杏から言葉が返つてくることはなかつた。僕はさらに語氣を強くして懇願するように言った。

「なあ、嘘つて言つてくれよ

そう言って振り向くと、彼女は壊れた目で宇宙戦艦ヤマトを歌つていた。

現実感のない現実だけが僕の目の前に広がっていた。

第八話・現実感のない現実（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。『感想・』指摘受付中です。僕としては最後のオチがちょっととうまくいっていないかなと思うので、次書く作品はもっと構成を練って書いて行きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9532e/>

120円の物語

2010年10月8日15時27分発行